

平成31年4月28日

若手研究者海外挑戦プログラム報告書

独立行政法人日本学術振興会 理事長 殿

受付番号 201880017

氏名 木田 俊吾

(氏名は必ず自署すること)

若手研究者海外挑戦プログラムによる派遣を終了しましたので、下記のとおり報告いたします。
なお、下記記載の内容については相違ありません。

記

1. 派遣先: 都市名 パリ (国名 フランス)
2. 研究課題名 (和文) : H. メシヨニックのリズム論における政治的射程-世界言語フォーラムでの活動を中心に
3. 派遣期間: 平成³⁰年4月1日 ~ 平成³¹年3月31日 (365日間)
4. 受入機関名・部局名: パリ第三大学
5. 派遣先で従事した研究内容と研究状況 (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

報告者の主要な研究対象であるフランスの詩人・言語学者のアンリ・メシヨニック (1932-2009) のリズム分析の技法は、単に詩を解釈するための装置としてではなく、既存の言語文化そのものへの批判的再考を促すものであり、その意味で文化的・政治的な広がりを持っている。報告者は、こうした射程の調査を行うため、フランスにおける少数言語を考える「世界言語フォーラム」でのメシヨニックの活動を中心に追うことにした。具体的な調査内容は、二つあり、一つはメシヨニックの具体的な倫理・政治的次元での実践的活動の調査、もう一つは1995年から毎年開催されているトゥールーズの世界言語フォーラムでの発言資料に関する調査であった。

前者では、パリ国立図書館 (BnF) とカーンに所在する現代出版資料研究所 (IMEC) での研究が中心となった。受入教員でもあるセルジュ・マルタン教授 (パリ第3大学) が、草稿調査を率先して協力してくれたおかげで、草稿調査は滞りなく進めることができた。IMECではメシヨニックのヴァンセンヌ実験大学時代の講義内容や、学生時代のノート等多くの伝記的資料を閲覧することができた。BnFでは、世界言語フォーラム事務局が刊行する機関誌『Linha Imaginôt』 (オック語で「想像の線」) のバックナンバーを閲覧し、既存の研究の著作目録にも載っていないメシヨニックの発言や、二次文献を数多く見つけることができた。

後者のフォーラム関連の資料は、前述の研究機関にも所蔵されていないため、直接トゥールーズの世界言語フォーラム事務局にまで問い合わせる必要があった。このためにまず5月に開催されるフォーラムに参加し、事務局の担当者であるダヴィッド・ブリュネル氏と知り合い、資料調査の許可をもらう運びとなった。ブリュネル氏は調査に対し非常に協力的で、現フォーラムの中心的人物である歌手のクロード・シークルやパリ第8大学名誉教授のジェラルド・デッソン氏を紹介してくれた。11月初旬に再びトゥールーズを訪れ、事務所での資料調査を開始した。そこでは、文書のみならず、映像・音声媒体等多くの記録が残されていることがわかり、大きな収穫となった。1995年から2000年まではすべて文字起こしがされていたため、これら文書の参照を最初に行った。文書媒体の調査終了後は、音声・映像媒体の閲覧を行った。2001-2004年までのものは、今回の調査では見つからなかったが、2005-2008年までのビデオテープを発見することができた。以上の調査によって、メシヨニックのリズム理論が、実践的な活動を通じて展開していることが明らかとなった。

6.研究成果発表等の見通し及び今後の研究計画の方向性(1/2ページ程度を目安に記入すること)

今回の研究では、具体的な資料調査が中心となった。今後はこれらの資料を整理分類し、これらをメシヨニックのリズム論における文化論・政治論との関連から読み解く作業が中心となる。具体的には以下の2点の調査結果を軸に、研究成果を発表していく。

1. フェリックス・カスタンとメシヨニックの関係性：フランス的「脚韻」を中心に

フランスの地方言語であるオック語圏の文化を守る活動家であり、トゥールーズのフォーラムの創設者であるフェリックス・カスタンとメシヨニックは共に、フランス中心主義的な態度に対する批判と脱中心化を訴えてきたという点で共通している。しかし、このフランス性に抵抗する動機や戦略は大きく異なっていたことが指摘できる。具体的には、両者の「脚韻」に対する捉え方から、その違いを見出すことができる。カスタンは、フランス詩の脚韻の起源が南仏・オック語圏にあることを強く主張することで、文化のフランス化に抵抗しようとした。ここには、第二次世界大戦中のルイ・アラゴンとジョエ・ブスケのフランス詩の脚韻をめぐる論争が背景にある。カスタンは、ブスケの「フランス詩の起源がフランス国家ではなく南仏にある」という立場を保持するものであった。一方のメシヨニックは、脚韻の起源の問題からは一定の距離を置きながら、あくまで一人の詩人が用いる脚韻について考えることを重要視した。そのために、20世紀のロシアの詩人マリナー・ツヴェターエヴァがフランス語で書いた詩の脚韻を取り上げ、この詩が、既存のフランス詩における脚韻体系を逸脱する力を持っていることを強調した。この成果は、今年度(2019年度)中に論文を完成させ、機関誌に投稿を行う予定でいる。

2. メシヨニックとラファエル・コンフィアンとの対談の発見

トゥールーズでの調査を通じて、マルティニックの作家ラファエル・コンフィアンと「クレオール」をめぐる長時間の対談を行っていたことが判明した。これまでメシヨニックは、部分的にクレオール性について触れてはいたが、具体的に考察を行ったものはなかった。その一方で、メシヨニックは、両親がロシア系ユダヤ人の出自であるという事情もあり、「外国人であること(非フランス人であること)」と言語の関係について、強い関心を抱いていた。このため、フランス語圏でありながら、「純正な」フランス語とは区別されるクレオール文化に対して、メシヨニックがどのように考えていたのかを検証する作業は、フランス語圏文学とメシヨニックの関係性を知る上でも重要なものとなる。ただし、権利関係上、報告者がこれらの資料を公表することはまだできないため、成果の発表には時間がかかることが想定される。ただし、事務局担当者のブリュネル氏は2020年頃までにこうした文書媒体を出版物またはオンラインで発表する予定であることを報告者に明かしてくれた。

7.本プログラムに採用されたことで得られたこと(1/2ページ程度を目安に記入すること)

多くの人々と対話・交渉を行っていく中で、数多くの素晴らしい出会いに恵まれた。報告者の研究に関心を持ってくれた専門家達をはじめ、詩や文学という共通の文化を通して、様々な人と対話・議論する機会が得られたのは、自身の今後の研究の方向性を考えるための非常に良い機会となった。地方の事務所に直接乗り込んで、資料を集めたり、インタビューをしたりするという行動力が、自分の中にあったことに報告者自身驚いているが、こうした行動を可能にしてくれたのも、当プログラムの支援があったからに他ならない。

報告者は日本語が母語であり、フランス語話者と完璧に意思疎通できるほどの語学能力を持たないため、時に自分の考えが明瞭に伝わらず、必要以上に説明を要してしまうこともあった。また、日本で過ごしてきた文化の違いから生じる問題も少なくなかった。こうした言葉の意図や文化的背景が伝わらないのは、ひとえに報告者の力量不足であり、決して相手にとって居心地の良いものではなかったはずだが、蓋を開けてみれば、報告者が出会った人たちは、自分の発する言葉に真剣に最後まで耳を傾けてくれた上、こうしたズレが生じてむしろ楽しんでさえいてくれた。これらは個人的な印象に過ぎないが、出会った人々とは、文化対文化ではなく、帰属を問わない個人対個人で対話をしているような感覚が常にあった。

本研究が研究対象とするメシヨニックも、こうした一人一人の話者の発話の運動に目を向け、そうした個々の言語活動が社会に与える影響について思考し続けてきた人物であった。本プログラムに採用されたことにより、これまで頭の中だけで理解していた「異文化コミュニケーション」というものの重要性を身をもって知ることができたように思う。